

連携協働科目の 科目開発状況（2023年度）

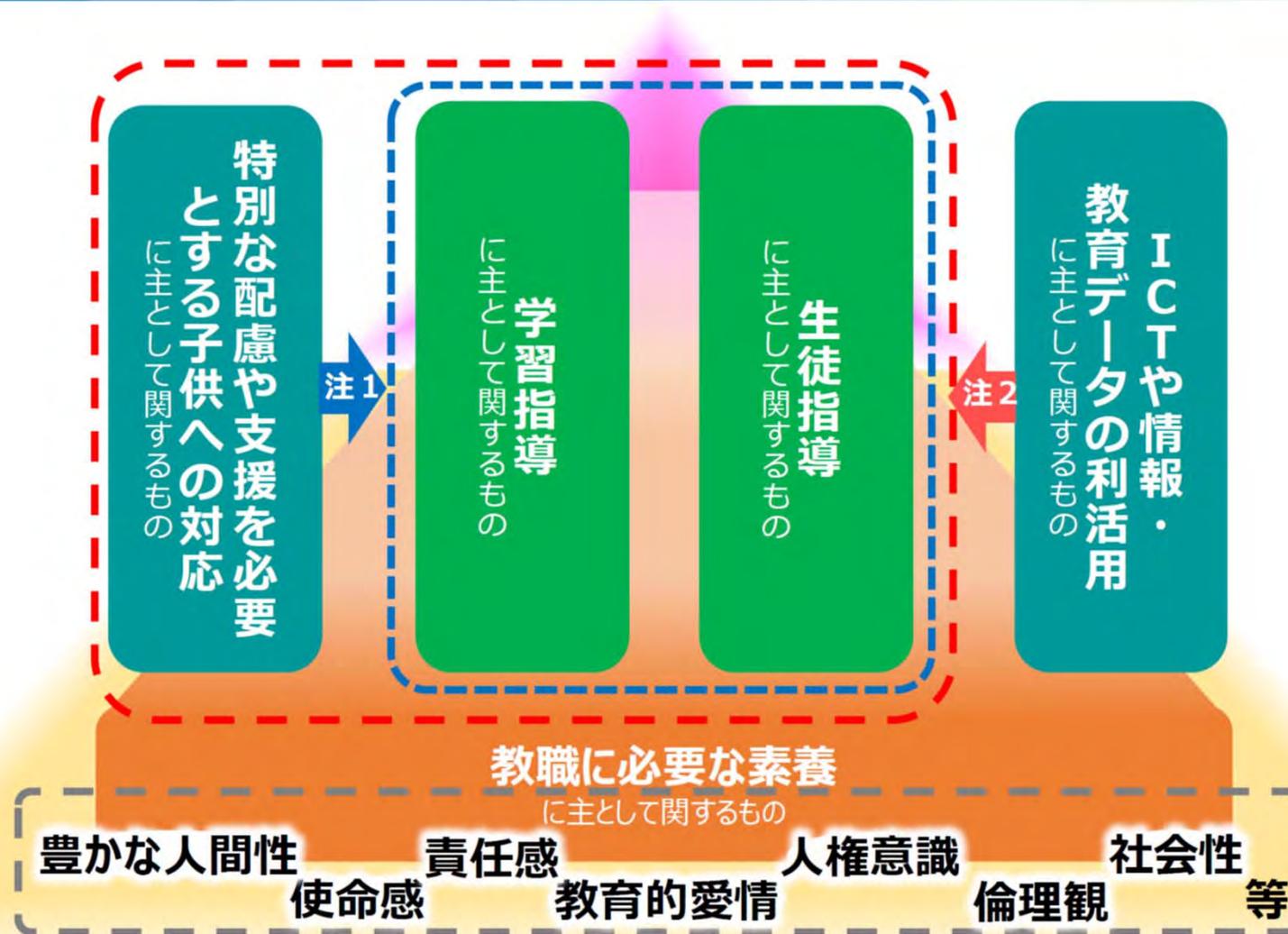
川上泰彦・山中一英・神内聡・三浦智子
濱野清・西盛康子



「資質能力」全体像における「連携協働」

- 「教員の資質能力」において横断的な要素とされる「マネジメント」「コミュニケーション」「連携協働」
- 本学の新たな教員養成スタンダード（案）においても「多様な関わりを構築し活かす力」として「連携・協働」「コミュニケーション」「ファシリテーション」が掲げられる
 - 教員としてさまざまな実践を行なって行くうえで、それらの領域を横断して重要な要素（いわゆる「横串」の要素）とされる

公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針 に基づく教師に共通的に求められる資質の具体的内容



※ 上記に関連して、マネジメント、コミュニケーション（ファシリテーションの作用を含む）、連携協働などが横断的な要素として存在

「連携協働科目」全体のコンセプト

- 学校教育の高度化・複雑化→「組織的対応」が求められる
 - 従来：「教職」（職業）への適応で多くがカバーできていた
 - 現代：「学校」（職場）への適応と内部・外部での連携が求められる
 - 教職課程において「組織マネジメント」「連携協働」を扱う必要
- ただし、初任期教員にとって「組織マネジメント」をイメージするのは難しい（中堅期以降の課題として認識される傾向）
- 学生にとっての「連携協働をめぐる課題の広がり」を整理
 - 学校組織マネジメントに関する学びの「入口」としての「**学校安全**」
 - 学校内に軸足を置いた連携課題としての「**児童生徒の指導・支援**」
 - 学校外も含めた幅広い連携課題としての「**防災**」

「連携協働科目」 3科目の設定

- 1. 「**子供の安全と学校組織**」 (1年次)
 - 学校組織マネジメントに関する学びの「入口」
 - その後の学校体験活動等への応用を期待

※2024年度より実装
- 2. 「**教師の連携・協働と学校経営**」 (3年次)
 - 主に学校内に軸足を置くことが求められる連携課題
 - 実地教育（教育実習）との相互作用を期待
- 3. 「**多機関連携と学校防災**」 (3年次)
 - 学校外も含めた幅広い連携課題

「連携協働科目」における学びの重点

- **題材**に関する学び
 - 「学校安全」「防災（教育）」「児童生徒の支援」に関する知識
- **仕組み**に関する学び
 - 学校組織のマネジメント体系と学校内部の連携協働
 - 学校外との連携（広がりと接点）
- **見え方（視点）**に関する学び
 - 学校内・学校外を問わず、他職種協働において発生する、事象の「見え方の違い」の認識（と視野の広がり）
 - 連携協働の必要性和難しさの体験

子供の安全と学校組織 1年次

- <学習目標>

- 学校安全に関する全体像を把握・理解し、学校内での安全管理（リスクの察知と対処・回避、事故発生時等の対応）について、具体的なイメージを持つことができる。
- 学校安全の観点から、学校の組織と活動・施設の管理について理解する。

- <内容（案）>

- 児童生徒の年齢・発達段階（学校種）によって異なる「学校安全」の勘所を知る
- 学校生活にかかる危機事例（教室内外の生活安全、交通安全、学校事故、不審者対応等）を用いた演習と、関連講義の組み合わせ

「教育制度論」(学部3年)での試行【事例検討】

- ある小学校の体育の授業で、小5の女子Aが転倒して頭を打った。授業をしていた男性の担任教師Tがすぐに保健室に連れて行ったところ、養護教諭は有休休暇で出勤していなかった。そのため、Tは特にAの状態を観察することではなく、氷のうを作ってAに渡し、頭を冷やすように指示した。
- Aはその後の授業も普通に出席した。TはAが帰宅する際に「痛みはどうか」「一人で帰れるか」と尋ねたところ、Aは「痛みはあるが、一人では帰れる」と答えたので、TはAをそのまま一人で帰宅させた。
- ところが、帰宅後にAの痛みは強くなり、母親Mが病院に連れて行ってCTで検査したところ、頭蓋骨にひびが入っており、全治1か月の大けがであることがわかった。Mは「なぜすぐに病院に連れていかなかったのか」「なぜ親に連絡してくれなかったのか」とTに抗議した。
- このケースでは学校とTはどのような対応をすればよかったか。事故直後にTがAを病院に連れて行った場合、どのようなことに気を付けるべきか。

授業展開

- 考察（個人）：10分程度
 - 【課題】この事例において、Tはどのような対応をすればよかったですでしょうか。
 - 確認する作業（何をどう確認すればよいか）
 - 連絡する作業（誰に何をどのように連絡すればよいか）
 - …について、ワークシートに自分の考えを整理
- グループ・ディスカッション：30分程度
 - 3～5名程度のグループで、【事例】のTはどのような対応をすればよかったか、ディスカッションを行ってみましょう
 - グループ・ディスカッションの結果をFormsに入力
- 回答共有・解説：40分程度

【解説1】 事例を解釈する際のポイント (1)

- ・ 教員の安全配慮義務
 - 児童・生徒がけがをしないようにする、けがをした場合に損害を拡大しないようにする
- ・ 養護教諭の存在と役割
 - 養護教諭が不在の場合はどうすればよい？
- ・ 教員の応急手当の法的性質
 - 応急手当は誰でもできる？
- ・ 危険等発生時対処要領（危機管理マニュアル）
 - 作成義務と確認義務

【解説2】 事例を解釈する際のポイント (2)

- ・ 保護者への連絡義務
 - 誰が連絡すべきか？連絡がつかなかったらどうするか？
- ・ 病院に連れて行く
 - 誰が連れて行くべきか？
- ・ 病院での説明
 - 誰が聞いて保護者に連絡すべきか？
- ・ 学校内での情報共有
 - 校長が不在の場合はどうすればよいか？
- ・ 学校事故統計
 - リスクはどういう場面にあるか？

【事後課題に向けて】 医療機関との連携

- ・ 学校医はどのような制度でしょうか？
- ・ 今回の事故では「何科」の病院に連れて行けばよいでしょうか？
- ・ 今回の事故では、必ずしておいたほうよい検査は何でしょうか？
- ・ 救急車を呼んだほうがよいでしょうか？
- ・ 病院が休診日だった場合はどうすればよいでしょうか？
- ・ 病院には誰が連れていくべきでしょうか？
- ・ 治療費はどうすればよいでしょうか？

【事後課題】

- ・ 学校で起きた事故の治療費について、どのような制度があるか調べて下さい。

試行演習を終えての反省

- **題材**に関する学び／**仕組み**に関する学び
 - どう定着を図るか（基本的な「知識」の確認が必要）
 - 誤った（もしくは不十分な）前提知識でグループワークを展開しても、応用（視点に関する学び）にならないおそれ
 - 「解説」パートの有効活用
- **見え方（視点）**に関する学び
 - グループワークの進捗確認や指導を行ううえでの、マンパワー確保（160人規模の必修として進めるための工夫）
 - 見え方の違いを、どう認識させるか（受講者の同質性の高さ、「自分ならどうするか」レベルにとどまる意見交換）
 - オンラインでの実施を余儀なくされた場合どうするか？（オンラインによる試行では、学びの共有に課題）

今後の科目開発（予定）

- 「子どもの安全と学校組織」の実装
 - 年度末までに：ケース教材の整備
 - 4月以降：ケース教材を用いた学習の展開
 - 2024年度前期中盤以降：学習成果の把握についてさらなる検討
- 「教師の連携・協働と学校経営」と
「多機関連携と学校防災」の試行継続（あと2年）
 - 引き続き「教育制度論」等の時間を活用
 - 具体的な教育内容の作り込み→試行→ブラッシュアップ
 - 事例教材の収集・選定（・作成）
 - ゲスト講師の選定・依頼

